日本中国語学会々報　2017年12月

http://www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶　木津祐子（会長）……1
2017 年度全国大会総括……3
2017 年度学会奨励賞の選考経緯……5
理事選挙開票結果報告……6
支部例会実施報告　2017.6 - 2017.12……6
内規・会則・規定改正のお知らせ……14
会議報告……16
例会および全国大会開催のお知らせ……22
事務局からのお知らせ……22
［資料１］『中国語学』投稿に関する誓約書……24
［資料２］『中国語学』投稿規程（2017 年 11 月改訂）……25
［資料３］『中国語学』執筆要領（2017 年 11 月改訂）……27

ご挨拶

木津祐子（日本中国語学会会長）

第 67 回全国大会は、秋晴れの 11 月 11・12 日、中央大学多摩キャンパスにて成功裏に開催されました。少々冷え込んだ二日間ではありましたが、中央大学に向かうモノレールの車内からは、頂上に雪をいただく富士山を見ることができました。学内にも富士見スポットがあったとか。楽しそうに遠望について語り合う声を、休憩時間などにちらほら聞くこともできました。

招待講演には、暨南大学の邵敬敏教授と趙春利教授、上海外国語大学の金立鑫教授の三名をお招きし、「虚詞」を巡る巨視的また微視的なご講演を拝聴することができました。招聘には中央大学の石村広会員がご尽力されました。また、研究発表者の選考から各分科会のスケジュール作成は、例年通り大会運営委員会が総力を挙げて取り組まれ、各分科会は司会者の方々の周到な事前準備と各教室スタッフの的確な舵取りで朝から活発な議論が繰り広げられました。中央大学関係者の方々には、会期全般を通じて献身的に大会運営に当たってくださいましたこと、心よりお礼申し上げます。

私はと言うと、開催校の皆さんの臨機応変で洗練されたお仕事ぶりを目の当たりにし、土地柄だけではない、大学独自の色や香りのようなものに触れることも全国大会の面白さかと、感銘を受けておりました。何を今さらという声が聞こえてきそうです。これまで自分がいかにボンヤリと全国大会に出席してい

たかを白状しているようなものですが、二年前にたまたま事務局をお預かりすることとなり、全国大会が多くの会員の手で丁寧に作り上げられていく過程を知ることで、節穴の眼にも見える景色が変わってきたのだと思います。私同様、いえずっと学術的でありましょうが、国内外からの参加者一同が様々な実りを手に、各々の根拠地へ帰って行かれたことを確信いたします。

さて、本年は二年に一度の理事改選の年でした。事務局は四年ぶりに箱根の関を越え、東京に移ることとなります。東京大学の大西克也新会長が組織される頼もしい事務局の到来を思い、まだ数ヶ月の任期は残していますが、私は心晴れやかです。

京都でお預かりした本事務局は、従来とは異なり、会員管理を主として担当する中西裕樹幹事、情報集約と発信を担う池田巧幹事、そして会計全般を統括する島津幸子幹事という幹事三人体制で発足しました。ともかく無事に次の事務局に引き継ぐことを至上命令として動き始めた事務局でしたが、三幹事の周到な目配りと高い問題処理能力によって、会則等の現行規約の問題点を改正することができました。大きな改正点を挙げると、会長・副会長任期に関する会則、選挙管理委員会の活動に関する内規、そして会員全体に関わる問題としては、ネット会員の将来的廃止を含む規約改定などがそれに該当します。詳細はこれまでのニューズレター及び本ニューズレター、また学会 Web サイトをご確認いただきたいと思いますが、不整合な点がかなり解決されたのではないかと思います。また、人文学を巡る圧力の中、隣接領域の学際的な交流強化が期待される情勢を受け、それに対する取り組みの一つとして、日本中国学会「学界展望」の語学部門を、本学会が責任編集する形の共同プロジェクトとすることが決定しました。すでに初代「学界展望」ワーキンググループが、佐々木勲人副会長の指揮の下に活動を開始しております。また、学会誌『中国語学』の電子化に向けての取り組みも、秋谷裕幸委員長を始めとする編集委員会のお骨折りにより、鈴木慎吾委員長のウェブリソース委員会との連携のもとで着々と進行中です。

振り返ると、文字通りの「無事」をスローガンに次へのバトンタッチを最大の目標とした我々の事務局も、大小様々な時代のうねりの中、それなりの奮闘を余儀なくされた二年間であったということでしょうか。特に 2017 年の 3 月に、会計幹事の島津さんが急逝されるという悲しい出来事を忘れることはできません。一瞬、茫然と立ち止まってしまった事務局でしたが、後任の緑川英樹幹事は経験者であったとこともあり、業務の途中引き継ぎという困難をものともせず、見事に舵を切り直してくれました。改めて、人に支えられた二年間であることを痛感します。

来年の第 68 回大会は、神戸市外国語大学を会場に開催されます。多くの方々が神戸に集い、確かな成果を次に繋げて行かれることを切に願っております。

2017 年度全国大会総括

Ⅰ．今年度大会総括

第 67 回大会は、中央大学多摩キャンパス（東京都八王子市）を会場に、2017 年 11 月 11 日（土）と 12 日（日）に開催された。

（1）参加者数

参加者総数は 338 名、うち一般参加者 280 名、招待者 3 名、開催校教員・スタッフ 26 名、出店業者 29 社であった。

（2）総評

近年の全国大会は、おおよそ大会 2 日目が 10 月最終日曜日から 11 月第 2 日曜日に当たるように設定されてきたが、今年度もそれに準じた開催となった。中央大学多摩キャンパスは東京西郊の丘陵地帯にある。キャンパスには起伏も多く、自然を身近に感じることができる。参加者は、平地よりもいくぶん早い秋の深まりを感じながら会場に向かわれたことだろう。

開催校の中央大学には大会までの長きにわたって、きわめて周到かつ万全なる準備をしていただいた。学生スタッフを含めた開催校の皆さんの献身的な働きにより、たいへん有意義な大会を開催することができたと考えている。中央大学の皆さんにはこの場を借りて厚くお礼申し上げたい。

初日には暨南大学・邵敬敏教授「汉语虚词框架词典编撰的方法论创新」、同・趙春利教授「“吗”的分布验证、焦点排序及其疑问性」及び上海外国語大学・金立鑫教授「反复义“又、再、还、也”的句法语义特征」の三つの招待講演が行われた。邵教授の講演は、現在、教授を中心に編纂が進められている『汉语虚词框架词典』の理論と実践に関するものであった。編集方針の中で最も重視されるのが、ある虚詞における特定の意味と機能が、どのような言語的条件の下で現れるのか、つまり意味・機能とコンテキストの関連性を可能な限り指摘することである（“定位框架”）。加えて、ある虚詞が持つ複数の語義項目の間に、通時的あるいは共時的にどのような関係性が存在するかを描き出す（“语义地图”）と同時に、相互に関連する複数の虚詞との比較から、当該虚詞の共時的な特質を浮かび上がらせようとする（“类聚比较”）。以上の 3 つの柱に基づく編集の実際を、具体例を以て示された。趙教授の講演は、語気助詞“吗”の持つ疑問特性を、その分布特性と応答形式の特徴から明らかにしたものである。趙教授によると、語気助詞“吗”は当否疑問文という文機能上の分布特性の他に、不定称用法の疑問詞やモダリティを表す副詞、あるいは述語動詞との間に一定の選択性を持つ。この選択性は、“吗”によって構成される疑問文の焦点が当該文の述語部分にあり、かつその述語内部において、モダリティを表す副詞＞能願動詞＞動補構造＞（一般の）述語の順に優先的に焦点が当てられることによる。そしてこのような“吗”による焦点化は、是か非かを相手に問い掛ける両極性と、話し手の判断としてのモダリティが優先されるという“吗”の疑問特性（“模态两极性”）に基づくものであることが、豊富な実例とともに明快な論旨によって示された。金教授の講演は、反復義を持つ 4 つの副詞について、4 語の交替可能性に関する調査に基づき、それぞれの語義と文法特性を明らかにす

るものであった。金教授によれば、平叙文に用いられる“又”は、“再”と事態の已然・未然について相補的分布をなすが、疑問文や感嘆文に用いられる“又”はそのような制約を受けない。また、“再”の表す反復義には事態の非連続性が認められるのに対し、“还”は連続性をその特徴とする。さらに“也”が表す同一性・類似性には、動作主体と動作行為の選択における 4 つの組み合わせについて、それぞれ使用上の優先度と許容度が異なることが指摘された。

ポスターセッションは昨年同様、二日目の昼の時間帯に開催された。教室の配置・備品等の制約から、他の会場の設営を含め、開催校はたいへんなご苦労をされたことと思う。セッションは隣り合う二つの教室に分かれて開催されたが、この点は特に問題にならなかった。むしろ会場配置の巧みさから多くの聴衆を集め、活発な議論がなされていた。

開催校のご尽力により、今年度も引き続き託児室を設置することができた。当初の予想通り利用者はごくわずかではあったものの、委員会としては子育て中の会員が安心して学会に参加していただけるような環境を提供し続けることが大切であると考えている。今後も開催校のご協力を得ながら、継続的な設置に努力していきたい。

全国大会は、内規上は本委員会が「企画と運営」を行うこととされているが、現状では大会準備会（開催校）の、それもきわめて少数の会員の献身的な働きに負うところが依然として大きい。人文系教員が大幅に減少している現今の情勢を鑑みれば、今後とも安定的に大会を開催するには、開催に係る負担をできるだけ会員が相応に分担することが必要になるだろう。

（3）改善点・反省点

研究発表応募書類中の「審査用要旨」については、規定字数を超過するものが後を絶たないために、何らかの対策を取る必要に迫られた。そこで今年度は、当該様式に書式の改変を禁止する旨の注意書きを付したところ、一定の効果は見られたように思われる。ただ、それでも昨年度と同様、1 件の応募を字数の大幅な超過による規定違反として失格とせざるを得なかったことは残念である。この点については、さらなる改善に努めたい。

発表者の所属・身分については、現行の「発表申込表」ではそれを厳格に記入することを求めていない（特にその身分について）。この点に関してプログラム作成段階で開催校に確認の手間をおかけすることになってしまったので、来年度に向けて記入項目を改善したいと考えている。

予稿集の原稿については、期限を過ぎても 1 件が未着という不測の事態が生じた。連絡が取れず本人の意思を確認することができなかったことから、やむなく「審査用要旨」を予稿集に掲載するという異例の措置を取った。本件に関しては当該発表者から弁明書の提出を受けたが、事柄の真相を判定することが困難であるため、このような事態を防ぐためにも、今後何らかの対応を取る必要があろうと考える。

なお、予稿集に関しては、発表者によってその引用文献の情報量に著しい偏りがあることが、複数の委員から指摘された。字数制限に関する公平性、あるいは学術的著作物としての一定の水準という観点からしても、ある程度の枠組みをはめることが必要であるかもしれない。この点についても今後委員会において検討していきたい。

分科会の研究発表に関しては、「講評」という制度をどのように捉えるか、講評者の間で一定のコンセンサスが必要ではないかとの指摘が一部の司会者から寄せられた。たいへん重要な指摘であるので、この点も来年度に向けて議論していきたい。

Ⅱ. 来年度の全国大会にむけて

（1）来年度の第 68 回大会は、神戸市外国語大学（神戸市西区）で開催される。開催日は 2018 年 11 月 3 日（土)、4 日（日）の予定である。

（2）来年度も初日の企画は招待講演 1 本及びワークショップとし、二日目に分科会発表及びポスターセッションを行う方針である。ワークショップの応募に関しては、2 月末までに学会ウェブサイトに応募要項を掲載するので参照されたい。

（3）来年度も研究発表の応募規定はウェブサイトでの告知のみとする。4 月初旬頃までに学会ウェブサイトに掲載されるので、その要領に沿って応募されたい。「発表申込表」及び「審査用要旨」については、今年度の反省を踏まえて「応募規定」を変更するが、詳細は追って告知する。また、予稿集投稿規定については、上述の通り鋭意検討を進めていきたい。やはり後日ウェブサイトに掲載予定であるので、発表希望者は注意されたい。

（4）今年度大会でも委員の中から 2 名を「予稿集編集サポート」担当として指名し、開催校の依頼に基づいて編集の実務に従事してもらった。今後は電子化と内製化の議論を進め、引き続き開催校の負担軽減に取り組む方針である。会員各位のご理解とご協力を切にお願いする。

（大会運営委員会）

2017 年度学会奨励賞の選考経緯

編集委員会では、2017 年 3 月の第 1 回編集委員会において、『中国語学』263 号に掲載された論文の中から学会奨励賞の選考対象とする論文 2 本を選出し、さらに 5 月に開かれた第 2 回編集委員会において、選考対象論文 2 本について慎重な協議を行った結果、以下の論文を 2017 年度の学会奨励賞受賞論文の候補とすることに決定し、この案が理事会において承認された。

学会奨励賞受賞論文
加納希美氏（愛知大学・非常勤講師）
拡張二重目的語構文の成立条件―臨時量詞による結果描写との関連を中心に―

【選考の経緯】

本論文は、通常目的語を一つしかとらない動詞が、二重目的語構造として成立する条件について論じたものである。従来、「攻撃」という含意によって成立すると主張されていた一部の拡張的な二重目的語構文について、本論文では、「加害」のみならず偶発的に発生する「被害」の場合にも成立することを指摘する。そして、いずれの場合も、量詞として借用された身体名詞が“一”と結合した構造を伴い、この構造の描写する遍満状態が、抽象的な意味で授与物として理解されることこそが、拡張的な二重目的語構文成立の条件だと主張する。

本論文は、これまで看過されてきた部分に着目し、拡張的タイプが構文としての力のみによって成立するわけではなく、当該構文が有する意味的特徴を特定の成分が代替することで成立すると論じている。主張するところは、考察対象とした現象について妥当な解釈を与えるばかりでなく、およそ拡張的タイプの成立条件を考えるうえで重要な示唆を与えるものであり、高く評価できる。

審査段階においては、本論文が対象とする現象が限定的であることや二重目的語構文全体における位置付けが明示的でないことなどが指摘された。しかしながら、一つ一つの推論を詳細に検証し、それらを慎重に組み立て議論するという堅実な手法に対する評価を覆すものではなく、編集委員会全員一致で奨励賞受賞論文として推薦し、理事会において承認された。

今後はより一般性の高い記述を目指し、ますます研鑽されることを期待する。

（編集委員会）

2017 年度理事選挙開票結果報告

第 67 回全国大会第 1 日（中央大学多摩キャンパス、2017 年 11 月 11 日）に理事選挙が行われました。開票の結果、以下の方々が次期（2018-19 年度）会長および理事に当選されました（「会長及び理事選出に関する内規」参照）。なお副会長につきましては、後日新会長が理事の中から委嘱することになります。当選者並びに各得票数は以下の通りです。

■投票総数 : 452 票（うち、有効投票総数 344 票、白票 98 票、無効票 10 票）

■得票数 :

1.	大西　克也	43（会長）
2.	三宅　登之	25
3.	竹越　　孝	23
4.	佐々木勲人	17
5.	楊　　凱栄	14
6.	小野　秀樹	12
7.	加藤　晴子	11
8.	山崎　直樹	10（以上理事）
次点	丸尾　　誠	10

（内規により同票数は年長者が当選となります）

（選挙管理委員長　遠藤光暁）

支部例会実施報告　2017.6 - 2017.12

◆北海道支部例会

◇2017 年 9 月 21 日（木）日本医療大学研修センター

・楊雯淇（北海道大学・院）：中国語談話標識“怎么说”の手続き的意味再考

中国語の談話標識「怎么说」は、複雑あるいは否定的で、微妙な情報を伝える発話の前で使われ、応答の開始、話題の推進、陳述の保持などの談話的機能や、話し手の責任の軽減や聞き手の不快感の軽減などの対人的機能を持つと考えられてきた。本発表では、「怎么说」は、話し手には発話の認知・言語表現化・伝達のいずれかのレベルに不確定性があるということを知らせるこ

とによって聞き手の高次表意の構築に制約を課す手続き的意味を持つという、関連性理論の分析を提案し、この分析によって「怎么说」の意味・機能を統一的に説明することができることを示す。最後に「活性化」の概念を用いてこの分析をさらに発展させる可能性について論じる。

・林恒立（北海道大学）：「ただでさえ」に相当する“都”の意味的・構文的特徴

現代中国語の副詞“都（dou1）”は、“総括”や“量化”の意味機能を持つほか、モダリティを表すこともある。一方、現代日本語には、“都”の意味機能をすべてカバー可能な副詞は存在しないものの、上述のモダリティを表す“都”については、＜見越しの評価＞を表す「ただでさえ」との類似性が観察される。本発表では、まず、先行研究に基づいて“都”の基本的な意味用法を確認した後、「ただでさえ X｛のに／のだから｝，さらに VP」構文に相当する“都 X 了，還 VP”構文を取り上げ、両者の意味的・構文的特徴の対照を行う。

・山田大輔（北海道大学・専門研究員）：上古から中古にかけての“矣”の機能変遷と副詞“將”との関係

中古期に文末の“矣”の使用が減少することは、孫錫信（1999）等によってすでに指摘されている。しかしながら、中古期にも『論衡』や『顔氏家訓』のように“矣”の使用が依然として高い文献が存在する。本発表は、これらの文献における“矣”は、ほとんどが、劉承慧（2007）の言うアスペクト的用法と語気的用法のうち、語気的用法を担うものであることを指摘した上で、①“矣”の語気的用法の使用が依然として高いのは、戦国期に副詞“將”の担う機能の多くを“矣”が担うようになったことに由来する、②中古期の語気的用法を主に担う“矣”が、再びアスペクト的用法を担い、唐五代によく見られる“也”へと発展していった、ということを主張する。

◆関東支部例会

◇2017 年 6 月 10 日（土）東洋大学

・神野智久（日本経済大学・非）：移動表現の意味的側面についての一考察

本発表は、動補構造（動詞＋方向補語）における動詞の意味役割について考察するものである。刘月华主编（1998）では、動詞と方向補語の関係を「動作と結果」とし、方向補語に前接する動詞が、その意味によって仔細に分類されている。言語類型論（cf. 田中・松本（1998））では、移動表現において動詞がどのような意味役割を担うのか、という観点から研究が進められており、発表者の知る限り、現代中国語において、移動表現における意味役割の分析は多くはない。そこで本発表は、刘月华主编（1998）を踏まえ、なおかつ言語類型論、認知言語学の枠組みから、動詞の意味役割について若干の考察を加える。

・濱田武志（京都大学・学振特別研究員）：粤語研究に於ける比較言語学の可能性

比較言語学の方法は漢語系諸語（中国語諸方言）で実践しにくい点も少なくないが、特に閩語に於いて Jerry Norman 以降、比較言語学的研究が活発である。粤語などの場合は、内部の変種だけが排他的に遡る「出来る限り新しい共通祖語」を求めるという、近過去の精密な推定が研究目標の一つとなる。ただ、閩語に比べて均質性の高い粤語を考察対象とする時、変種間の歴史的関係を客観的に論ずることが難しい。そのため、粤語史をより厳密に推定するには、方法自体の一般化・抽象化が必要である。本発表は、粤語史研究の理論的課題を論ずると同時に、「反証可能性の担保」という形で、「系統樹か言語層か」というモデルの違いを克服する方法についても検討する。

◇2017 年 9 月 17 日（日）大東文化会館

・陳玥（東京大学・院）：「V 起来」と「V 得」構文の意味機能に関する考察

現代中国語の「NP+V 起来+AP」構文と「NP+V 得+AP」構文について、“V 起来”を用いた“今天的新干线坐起来很舒服”では、連体修飾語の「今天的」を削除しても問題なく成立するが、“V 得”を用いた“今天的新干线坐得很舒服”では、「今天的」は削除できず、“新干线坐得很舒服”は非文となる。「V 得」構文に関しては盛んに議論が行われてきたが、その多くは動詞接尾辞「得」の前後にある V と AP の意味関係に関する考察であった。本発表では、動作対象を表す主語が裸名詞の時になぜ二つの構文の間に違いがみられるのか、「V 得」構文の主語に立つ名詞句がそうした制約を受ける意味論的根拠は何なのかについて考察する。

・田村新（首都大学東京・非）：清末民初の中国人による量詞研究について

拙稿 2009 では、1920 年代前半に中国語白話文法を記述した著作における品詞や助動詞に関する記述の他、量詞に関する記述を考察し、黎錦熙 1924『新著国語文法』で初めて量詞という術語が使われたのではないかとの結論に至った。本発表では、1920 年 4 月『白話文做法』、『教育雑誌』第 13 巻（1921 年）第 10 号に掲載された何仲英「国語分量詞的研究」などの白話文法を記述した著作、さらには馬建忠 1898『馬氏文通』、來裕恂 1906『漢文典』、章士釗 1907『中等国文典』等、文言文を記述した文法著作にまで調査の対象を広げ、白話文言を問わず清末民初に中国人が量詞をいかに研究してきたのかについて考察したい。

◇2017 年 12 月 2 日（土）お茶の水女子大学

・田禾（関西学院大学）：现代汉语动词的隐现

对于现代汉语中的词汇在句子表层的隐现问题，以往多是针对动态助词、语气助词、还有一部分关联词的研究，而对于动词的隐现缺少总体的观察。本文通过对一部分动词的隐现实例进行分析，分别从完句成分、信息传递、主观与客观等角度，探讨动词出现与否对句子所产生的不同影响。具体来说，“进行/加以”类动词主要起到完句作用;“被就业/被自杀”隐含的[make]类动词因为不影响句子的合格度和信息传递而得以藏身;“觉得/认为/想”类动词凸显言者的主观看法，在对话中出现时其语用功能刚好是交际策略的有效运用。动词隐现的动因和机制各有不同，本文认为，现代汉语的动词隐现最终是在经济性原则的支配下，选择最合理的表达方式来承载适量信息的结果。

・安本真弓（跡見学園女子大学）：可能を表す“能”と“会”のメカニズム

“能”と“会”は、両方とも「できる」義を表し、「一定のレベルに達する」義を表すのは“能”であると従来の研究では指摘されている。しかし、“她很能说话，一口气说了一个上午。”“她很会说话，说出来的话让人心服口服。”の例では、“能”も“会”も「一定のレベルに達する」義を表すと言えるが、明確に使い分けているのである。そこで、本発表では言語事実の再考を踏まえた上、“能”は「状況可能」として捉え、「臨時性」及び「動態性」の意味特徴を持つ。一方、“会”は「推測可能」として捉え、「恒常性」及び「静態性」の意味特徴を持つとすることができると考える。

◆東海支部例会

◇2017 年 11 月 25 日（土）愛知大学

・高謙（名古屋大学・院）：“让”構文が表す「使役」と「受身」の意味的接近点

現代中国語において、“让”構文は主に「主体が客体にある動作をさせる／ある状態に変化させる」という使役の意味を表す一方で（例：“小王让小红回家”）、受身マーカー“被”に類似する機能を有することが認められる（例：“小王让小红打伤了”）。“被”構文が「受け手が仕手の引き起こす行為の作用・影響を被る」という単一的な受身の意味を表すのに対し、“让”構文は「指示」「許可」「放任」「誘発」など様々な使役の

意味を持つ。本発表では共時的な観点から、まず使役範疇における“让”構文の各意味素性を追究し、受身文の意味特徴と対比する。その上で、“让”構文が「使役」と「受身」を兼用し得る意味的動機付けについて論じていく。

・赵宏刚（名古屋大学・博士候補研究員）：从疑问代词到情态标记的演变 —“怎么样”探微

在“怎么样！我说的对吧。”这类表述形式中，疑问代词“怎么样”发生了文法化，已经演变为一个情态标记。情态标记“怎么样”没有一个明显、长期的语法化过程。通过对历史语料的检索分析发现，情态标记“怎么样”形成的直接影响因素并不是“怎么样”的一般疑问用法，而是其反问用法。反问的语用特征表现为说话人相信自己的认知判断，从而对听话人的意见看法等质疑，并通过反问形式进行否定。而情态标记“怎么样”的语用特征体现了说话人对于自己的见解或预期等持有自信，进而用“怎么样”凸显自己的这种自夸、炫耀的态度。隐喻机制在情态标记“怎么样”的形成过程中发挥了不可或缺的作用。

・勝川裕子（名古屋大学）：中国語の禁止表現 —“不能”と“不要”が表す＜禁止＞

中国語の禁止表現には代表的な形式として“不要／别＋VP”がある。一方で、可能の助動詞“能”の否定形“不能”も＜禁止＞を表すことがあり、中国語の初級教材でも注記されることが多い。しかし、＜不可能＞と＜禁止＞がリンクし得る動機付けや“不能＋VP”が＜禁止＞を表す条件について追究した先行研究は少なく、“不要＋VP”と“不能＋VP”の異同についても明確な説明が与えられているとは言い難い。本報告では、“不能”と共起する人称や動詞フレーズの性質、発話環境を観察することを通じて、“不能”が表す＜禁止＞の根源的意味を明らかにし、“不要＋VP”と“不能＋VP”が表す＜禁止＞のニュアンスの相違について考察する。

・荒川清秀（愛知大学）：中国語の教え方（その二）

（その一）では、教室運営、授業のすすめ方から発音・漢字教育まで報告した。今回は文法で学生や教師がぶつかる問題について報告する。(1) 文末の“了”は必ず“了2”が関わること。(2)“给我看看”の“给”は“给我拿来”と比較すれば動詞として解釈するのが妥当で、＝“让”は成立しないこと。(3)“学了几年汉语(了)？／来日本多长时间了？”における文型の違いは継続動詞と変化動詞の違いからきており、“来”や“日本”の後に“了”が来ないのはこのフレーズが主語化していること。(4)“是～的”構文は、動詞の前の部分に焦点があり、動詞の後の成分が問題になる“你买什么了？／你去哪儿了？”では“是～的”構文はとれないこと等々。

◆関西支部例会

◇2017 年 6 月 18 日（日）大阪産業大学

・鳥羽加寿也（大阪大学・院）：双声畳韻字による古漢語音韻の研究 —後漢～晋の双声畳韻字を例として—

本発表では、『文選』より収集した双声畳韻字を材料として、それらが反映する漢語の音韻について考察を行う。双声畳韻字には、従来古音研究に利用されてきた諧声字等の材料とは異なり、純粋に語音に基づいた現象であるという利点があるため、有用性がある。具体的な発表内容としては、先ず後漢～晋の韻部と先秦の韻部との異同が畳韻字にどのように反映されているかを観察し、その後、畳韻字について、第一音節と第二音節の声母の組合せと基本的語義の関係が古音研究にどのように活用され得るかを述べ、また、双声字について、第一音節と第二音節の声調の組合せに制限がみられることを指摘し、その理由を考察する。

・李藝（神戸市外国語大学・院）：現代中国語の“被”受動文 －日中対照研究からのアプ

ローチー

本研究では，中国語の有標受動文の分類について考察し，“被”受動文を中心に日本語との相違点と共通点を見る。中国語の“被”受動文の成立を左右するのは動作の影響であり，影響を明示することが受動文の目的といえる。本研究では，影響を含意する受動文を受影受動文と呼ぶ。直接受影受動文について，事態の客観的把握が発達し，結果を明示的にすれば非情物（モノ／コト）も主格になれる。他動詞が間接受影受動文を成立させるためには，対格項以外の他者への影響を含意しなければならない。さらに，“属性叙述受動文”という分類を導入し，受影性がない点はほかのタイプの受動文と大きく異なるので，区別する必要があると考える。

・李佳樑（関西大学）：谓语前第三人称单数代词语法化的第三条道路－普通话口语里的动向

谓语前第三人称单数代词语法化的第三条道路－普通话口语里的动向 普通话口语里存在一个谓语前的非回指的“他”。这类“他”的上下文都带有事态“不如意”或“惊异”的意味，不具该意味的上下文则排斥“他”。这类“他”属于情态／语用标记，可能代表了第三人称单数代词语法化的一个新的方向。其语法化经过了主谓之间回指性的“他”这一阶段。句法上的羡余性淡化了“他”回指第三人的功能，“他”前主语突破第三人的限制；出现在作格动词前标志着情态／语用标记“他”的成熟。“他”发展出该用法有其语义基础：“他”本是不在场的第三者，其行动或属性具有“不如意”等可能；“他”出现在期待为主语的位置，起到形式上增加论元、提高受影响性的作用，与“不如意”等的“高影响性”相吻合。

◇2017 年 12 月 17 日（日）大阪産業大学

・肖潔（北海道大学・院）：海南漢字音と日本漢字音の対応関係について－声母を中心に－

海南語は、主に中国海南省で用いられる閩南語諸方言の一つである。Sung（1992）、厳（1994）は、漢語諸方言のうち、日本漢字音（漢音と呉音）と閩南方言との関係が特に密接し、漢音・呉音と閩南語のそれぞれの歴史的音声変化に見られる共通点が他の漢語方言より多いと述べている。アモイ方言を閩南語の代表方言として、日本の漢音・呉音との対応関係を考察した先行研究もある。本発表は、海南語を対象に、日本の漢音・呉音との対応関係の考察を試みるのが目的である。中古声母音をもとに、海南漢字音と日本漢字音の声母（頭子音）は、それぞれどのような変化が起きたかを考察する。それを踏まえて、海南漢字音と日本漢字音の声母（頭子音）対応関係を導く。

・邱馨儀（関西外国語大学・院）：日中類別詞のカテゴリー化に関する認知言語学的研究 －生物に関わる類別詞を中心に－

現代日本語の助数詞の中核を占める多くは中国から借用したと言われている。日中において、同じ漢字を用いる類別詞が数多く存在しても不思議ではないが、両者の対応状況は未だに明白になっていない。本研究では、『そこんとこ何というか辞典』を研究対象とし、その中に記載された「頭」が用いられている 16 種類の生物について、中国語の数え方に直してみると、量詞の「頭」以外、さらに「匹」、「口」、「隻」と「條」の４つの下位分類に分けられる。認知言語学の観点から、類別詞の使用に関わる認知主体の認知プロセスを考察しながら、それぞれの分類基準を考察する。また、両言語において、生物に対しての捉え方を明らかにするのが目的である。

・令狐菁菁（新潟大学・院）：「完了義」を表す“V 完”、“V 光”、“V 成”について

中国語の“完”と“光”、“成”は全て動詞に後接し、動作･行為あるいは状態の完了を表すことができるが、異なる特性を有する。例として、以下の例文をあげる。(1) 这部电影我看{完/*光}了。(2) 他把我的零食都吃{光/*完 }了。(3) 这本小说我看了一个周

末，终于看{完/*成}了。(4) 魔术师把老虎变{成/*完}了美女。(1) では“完”だけ用いられ、(2) では“光”だけ用いられる。その両者は共に容認されない。 (3) と (4) も同じく共に容認されない例文である。本発表では“完”、“光”、“成”これら 3 種の結果補語の使い分けについて、その意味的相違を考察する。

・［講演］木村英樹（追手門学院大学）：“笑道”のポライトネス

林黛玉はよく笑う。賈宝玉はさらによく笑う。二人に限らず、『紅楼夢』の登場人物は夥しく“笑道”する。つまり「笑って話す」。なぜか？ 本講演では、清代の章回小説に用いられる動詞表現“笑道”を取り上げ、語構成および談話上の特徴を明らかにし、併せて、“笑”の機能拡張の可能性を指摘する。さらに、それらの議論を踏まえて、『紅楼夢』に“笑道”が頻出する理由を文法論と文学史の観点の両面から考察する。

◆中国支部例会

◇2017 年 6 月 11 日（日）広島大学

・侯仁鋒、陳春祥（県立広島大学）：音声練習の学習過程を記録できる中国語授業外学修支援システムの利用報告

大学で中国語を第二外国語として履修する学習者は多い。当然、クラスの人数が多い上、授業時間が限られているという現状において、入門段階の授業では発音の練習が十分に出来ないことから、授業外の宿題として出されることもよくある。しかし、宿題として出せば心配事が二つできる。一つは正しく発音できるかどうかがモニターもサポートもできないこと。もう一つはやったかどうか（音声だから消えてしまう）チェックできないことである。このような課題を解決する試みとして、本システムを開発した。本発表では、学生が各自でおこなっても正確に発音練習ができ、かつその練習の回数、正確さも追跡可能となる本システムのインターフェースとその実践活動を報告する。

・李郁蕙（広島大学）：台湾文学の使用言語について

近年、新たに市民権を獲得しつつある「台湾文学」における使用言語について考察する。方法として、ここ二十年台湾で相次ぎ新設された台湾文学に関する各大学研究科の学位論文をもとに、どのような言語で書かれた作品が研究対象に取り上げられているかを調査した。そこでは、中国語だけではなく、日本語や台湾語、客家語、原住民語など多岐にわたることや、そのうち特に日本語関連のものが全体の 2 割を占めていることが分かった。けれども戦前世代の高齢化に伴い、中国語を公用語とする現在の台湾社会では、日本語の読者層が減少している現実がある。そのため、実際中国語訳を通して読まれていることがほとんどだが、どのような問題点があるかについて、具体的な例を挙げながら見ていきたい。

◆九州支部例会

◇2017 年 7 月 8 日（土）福岡大学

・石亮亮（熊本大学・院）：关于对明清时期“齐整”和“整齐”的考察

在现代汉语普通话中，“整齐”较为常用，“齐整”用的很少，用法基本相同，两者主导义为“东西不凌乱、外形规则完整”，方言义均为“漂亮、俊俏”，那么在近代汉语中“齐整”和“整齐”这对逆序语使用情况又是怎样。清初期《醒世姻緣傳》中“齐整”出现 115 例，“整齐”仅出现 2 例。通过考察发现，明清时代“齐整”无论在小说叙述描写部分还是在口语会话部分，出现频率远远高于“整齐”，即“齐整”较为常用，“整齐”用的很少，并且“漂亮、俊俏”义是“齐整”的常用义之一，南北方皆有使用。本稿主要探讨明清时代“齐整”和“整齐”在语义功能方面具有哪些区别，并从句法结构上，会话文、

叙事文的使用方面进行阐述，同时探讨怎样演变到现代汉语。

・张恩培（熊本大学・院）：对于《醒世姻緣傳》中“踏、踩、跺”的考察

现代汉语中“踏、踩、跺”都可以表示脚部用力于地面或物体的动作。虽然《现代汉语词典》对三者作出的基本释义如出一辙，但是通过对《醒世姻緣傳》的考察发现，他们由各自的本义引申出来的意义却是大相径庭。如“踏青”“踏雪”等在描述足部动作的同时，还隐含“前进”的意义。又如“踩”所描述的动作中，与接触物体的位置关系一般不需要再次使用介词来说明。另外“跺”在现代汉语中的基础释义有三个：①跌倒。②小孩行走的样子。③携幼儿行走。然而《醒世姻緣傳》中“跺”的使用却是更加丰富。即：①用力踏地;跺。如跺脚。②踹;踢。如跺门。③剔扎。当“跺”在描述用力踏地的动作时，与“踏、踩”相比较“跺”更加能够突出动作的力量之大等。

・陈陆琴（九州大学・院）：汉语动词重动句和名词短语

关于重动句的先行研究有很多（范晓 1993，王灿龙 1999，刘 2012 等），但是，到目前为止笔者没有看到有关名词短语对重动句的影响的专门研究。所以，本文的研究目的主要是探究名词短语对动词重动句的影响。通过考察，我们发现名词短语有无修饰语会在语义上和句法上对动词重动句产生影响。首先，第一个动词之后的名词短语可以有修饰语也可以有修饰语，但是两者在语义上有区别。有修饰语时，即使没有前后文，重动句一般暗含有对比和强调的意思；而没有修饰语时，一般只表达陈述的意思。其次，第二个动词之后的名词短语都必须还有修饰语。它们构成的动宾短语表示结果的意思。

・王姝茵（熊本大学・院）：明清白話小説の中の非親族を呼ぶ親族呼称語について ―女性を呼ぶ親族呼称語を例として

明清白話小説中、親族呼称語を用いて非親族を呼ぶ現象は多い。特に女性を呼称する時よく用いられる。先行研究では、“亲属称谓扩大化”、“拟亲属称谓语”、“亲属称谓外化”の三つの考え方があり、親族呼称語を三つの概念の中どれかに嵌めて説明する。しかし、筆者は、実際は三つの概念に各々合致していると思われる。例えば：“嫂子”、“大嫂”、“奶奶”等。更に、ある呼称語の使用は歴史的に変化していることもある。例えば、“姐姐”は“拟亲属称谓语”、後に“亲属称谓外化”として用い、現代漢語で“亲属称谓扩大化”とする。本報告は非親族の女性を呼ぶ親族呼称語について、「親族呼称語を用いて非親族を呼ぶ現象」を検討する。

◇2017 年 12 月 2 日（土）熊本大学

・宮下尚子（福岡大学）：《児女英雄伝》に見える“跟”

太田辰夫『中国語史通考』では、“跟”の介詞化の時期を「“跟”は清末に至って介詞および連詞となった」、清代後期の《児女英雄伝》では、「介詞“和”は本書には無く、すべて“合”と書く。“合”は連詞にも用いる。“跟”は近似の例が一つ見えるにとどまる」とし、“就是我過來那年舅母跟我姐姐在園裏住的那一程子的事麼”」（40 回）を上げる。“跟”の動詞と介詞の境界は曖昧であるが、介詞節の後に来る主動詞が非移動動詞の場合、前項“跟”の移動に関わる意義は抑えられていると思われる。その“跟”を伴う非移動動詞として“吃”や“講”の例がある。本発表では、《児女英雄伝》北京聚珍堂本を底本として、“跟”の語法化についての検討を行う。

・楊明（九州大学・院）：早期白話における“是”構文に関する一考察

上古漢語において“是”が主に指示詞として使用され、中古時期に至ると、指示機能が衰退して繋辞としての機能が強くなったという傾向が検証された。“是”構文の意味変遷及びその文法化プロセスを究明の一

端として本稿では早期白話に属する《遊仙窟》（以下略称《遊》）と《大唐三蔵取経詩話》（以下略称《大》）というテキストをデーターベース化して「是」構文の全体像を把握した。《遊》では合計 37 例で、《大》では合計 80 例を取り上げて考察した結果、“是”がコピュラとしての使用頻度が非常に高いこと、及び「是」の前に副詞が“是”と共起すること、つまり「NP, 副詞+是 NP」という構文の出現頻度が高いということが明らかにした。

・石亮亮（熊本大学・院）：关于对《醒世姻缘传》中的“常时”的考察

“时常”一词在现代汉语普通话中使用频繁，而与其词序互逆的“常时”一词却很少被使用。然而对清初《醒世姻緣传》的考察发现，“常时”在当时使用频繁，作时间名词平时往常义,基本以口语会话体出现,虽然意思与“平时”“往常”相近，但“常时”更多的强调与现在节点的对比°另外对其在汉语史上演变考察，“常时”经历了上中古时期从通用语到明清时期以至现代汉语方言南方型词汇的历时变化。本文主要选取《醒世姻緣传》中双音复合词“常时”，首先分析“常时”的词汇化过程，其次对其在汉语史上的发展演变轨迹加以考察，揭示其使用特点,又将“常时”与当时意义相关联的近义词进行比较，探讨其使用差异。

・楊偉健（九州大学・院）：認知意味論の立場から見る“什么”の各意味間関係

従来、“什么”の構文上の特徴について分析した研究が多く見られるが、認知言語学的観点からの分析が不足している。本稿は認知意味論の枠組みを用いて“什么”について分析した。そして、辞書の記述及び先行研究の知見を踏まえ、“什么”の意味分類を再考した。その上、「中日対訳コーパス」を使用し、具体例を分析することによって、各意味の特徴を図式化し、理解しやすくしている。さらに、各意味間の繋がりを考察し、意味ネットワークにまとめられる部分はできる限りまとめている。今報告では、これらの分析によって、“什么”の意味拡張プロセス及び各意味の関係が意味ネットワークで分かりやすく示すことができる点を証明する。

・王姝茵（熊本大学・院）：明清時代の親族呼称語の“爷”“爹”“叔”

“爷”、“爹”、“叔”は日常生活で常用される男性の親族呼称語である。明清白話小説資料の中では、親族への呼称語以外、非親族の相手を呼ぶ用例はたくさんある。それらの用例は意味機能面では、同じ呼称語の中でも必ずしも同じではない。歴史的視点から見れば、“爷”、“爹”、“叔”の意味機能は単一化、厳密化される傾向があると思われる。本稿は、これまでなされていない各資料間の用法上の差異を明らかにする。具体的には、北方区域に属する《金瓶梅詞話》、《醒世姻緣傳》、《紅樓夢》を中心に“爷”、“爹”、“叔”の意味機能を比較した結果、意味の単一化、同時に指示機能が系統化される傾向にあることを証明する。

・趙葵欣、劉莎（福岡大学）：基于文献记录的 [kei214]（给）音再考

现代汉语里 give 义动词“给[kei214]”的发音一直是学界公认的音变例外（太田辰夫 1958；潘悟云 1985）。不仅其来源尚无定论（太田辰夫 1958；志村良治 1995；池田武雄 1962；平山久雄 2000），[kei214]音产生的时间也很不明确。本研究通过考察两类语料（A.从《四元玉鉴》、四版《老乞大》到明末《醒世姻缘传》等 9 部官话教材及白话小说；B.从《西儒耳目资》、《字典》、《汉英韵府》到《官话口语语法》等 7 部传教士著述的发音记录）初步确认了 [kei214] 发音的出现及成熟时期。参照语音变化理论（Philips2001；Bybee2002、2006；Marlett2017），本研究从语言使用角度认为使用频率、词形结构及词性对语音演变有重要影响。

内規改正のお知らせ

■ 2017 年 11 月 11 日、中央大学多摩キャンパスで開催された評議会において、内規の改正が承認されました。

改正前	改正後
会長及び理事選出方法に関する内規 （→第 10 条関連） (4) 選挙は役員改選時の全国大会当日に行い，評議会の承認を得て会長が委嘱した選挙管理委員会が管理運営するものとする。 (5) 選出方法は，当分の間，会員が全国大会に出席の際，受付で投票用紙を配布し，大会会場に設置する投票箱に投票するものとする。投票用紙の配布は会員総会開会時をもって終了する。投票は開票 5 分前に終了する。開票は会員総会の席上で行う。	(4) 選挙は役員改選時の全国大会当日に行い，理事会の承認を得て会長が委嘱した選挙管理委員会が管理運営するものとする。 (5) 選出方法は，当分の間，会員が全国大会に出席の際，受付で投票用紙を配布し，大会会場に設置する投票箱に投票するものとする。投票は会員総会開会時をもって終了する。開票結果は会員総会にて報告する。

【改正理由】選挙管理委員の委嘱が総会直前の評議会での承認では、委員会による選挙の事前準備等に支障をきたすため。改正前の規定は学会運営の実情に合っていない。また改正前の条文では、投票の時間帯の基準が明確ではないうえ、総会の会場内で開票作業を行うかのように誤解される恐れがあるため。

会則の［付則］の改正のお知らせ

■ 2017 年 11 月 11 日、中央大学多摩キャンパスで開催された評議会および総会において会則の［付則］の改正が承認されました。

改正前	改正後
第 7 章 会則及び内規の変更 **［付則］** 1. 本会の事務局は，会長の所属機関またはその所在地に設置し，あわせて事務支局を中西印刷株式会社（〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル西大路町 146 番地）内に置く。	**［付則］** 1. 本会の事務局は，会長の所属機関またはその所在地に設置し，あわせて事務支局を中西印刷株式会社（〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル西大路町 146 番地）内に置く。

2. 会則，内規の変更は，会員総会，評議会での決定と同時に，施行時期を定める。	2. 会則，内規の変更は，会員総会，評議会での決定と同時に，施行時期を定める。 3. 規定の改廃は、内規に準ずる。

【改正理由】これまでの運用に照らして、「規定」の改廃に関する条項の不備を正すため、第３項を追加する。

特別規定廃止のお知らせ

■ 2017 年 11 月 11 日、中央大学多摩キャンパスで開催された評議会および総会において会則の［付則］の改正が承認されたのち、内規に準じて規定が廃止されました。これにともない、ネット会員は 2020 年 4 月 1 日以降、通常会員に統合されます。同時に、通常会員に対して行っていたニューズレター、支部例会案内等の文書の郵送も、特に必要とする場合を除き、廃止することになります。なお会誌、会費請求書類、会員名簿は、これまで通り郵送いたします。

改正前	改正後
［会費納入に関する特別規定］ （2011 年度より改正施行） 1. 通常会員のうち，必要な情報を学会ホームページによって取得する会員を「ネット会員」と呼び，会費を 1,000 円割引する。この優遇措置は，海外会員には適用されない。ネット会員には『中国語学』，会員名簿及び会費請求は郵送するが，それ以外の文書（ニューズレター等）は郵送しない。 2. この特別制度の適用を希望する会員は，学会に対して申請する。「ネット会員」の認定は会長の監督の下で事務局が行う。なお，申請の時期に関わらず，本制度の適用は次年度の 4 月からとする。ただし，新入会員については入会時に「ネット会員」の適用を申請することができ，認定後ただちに本制度の適用を受けることができる。 3. ネット会員は，必ず有効な電子メールアドレスを学会に通知し，学会からの連絡を受けるものとする。	（2020 年 3 月 31 日を以て廃止）

［なお，この特別規定は継続の適否も含めて，2 年ごとに見直しを行うこととする。］	

【廃止理由】本学会に関する諸手続ならびに諸連絡は、全会員を対象に e-naf によるデータ管理および学会ウェブサイトでの告知が一般化し、広く普及したことによる。

会議報告

■ 2017 年度第 2 回理事会

日時：2017 年 11 月 10 日（金）16 時～18 時

場所：中央大学多摩キャンパス 1 号館本部棟 4 階 1408 会議室

出席者：木津祐子（会長）；佐々木勲人（副会長）；遠藤光暁、加藤晴子、竹越孝、三宅登之（以上理事）；秋谷裕幸（編集委員長）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；宮本徹（大会運営委員長）；池田巧、中西裕樹、緑川英樹（以上幹事）

欠席者：古川裕、山崎直樹（理事）、平田昌司（辞典編纂委員長）

■ 2017 年度評議会

日時：2017 年 11 月 11 日（土）10 時 15 分～11 時 45 分

場所：中央大学多摩キャンパス 3 号館 4 階 3455 室

出席者：構成員 43 名（定数 64 名）

■ 2017 年度総会

日時：2017 年 11 月 11 日（土）16 時 50 分～17 時 50 分

場所：中央大学多摩キャンパス 3 号館 2 階 3115 室

【議長選出】

議長に荒見泰史会員（広島大学）、伊藤さとみ会員（お茶の水女子大学）を選出した。

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 会員動向（10 月 1 日現在）

中西幹事より以下の報告があった。

・会員数：（2016 年 10 月 1 日から 1 年間の増減：住所不明者、年度末退会予定者を含む）

			増減
総会員数（賛助除く）		1197 名	＋8
（内訳）	顧問	5 名	±0
	名誉会員	22 名	－1
	通常会員	718 名	－13
	ネット会員	354 名	＋14
	団体会員	7 名	－1
	海外会員	91 名	＋9
賛助会員		23 社	－1

・〔昨年度除籍者〕53 名（国内会員 34 名 / 海外会員 19 名）［2016 年 10 月 3 日付］

・〔今年度除籍予定者〕43 名（国内会員 36 名 / 海外会員 6 名 / 賛助会員 1 社）

・〔ご逝去〕2 名（長谷川良一名誉会員、島津幸子会員）

＊ 会員動向については、直近の数字ではなく、4 月 1 日付の状況を春の理事会に、10 月 1 日の状況を秋の理事会に報告する。［除籍者は 10 月中に確定］

1.2. 支部例会関連

中西幹事より以下の報告があった。

・過去一年間の実績は『中国語学』264 号「彙報」を参照。

・支部例会開催通知はメールに移行中、ハガ

キ希望の方には郵送を継続（現在 46 名）。

2. 編集委員会報告

秋谷委員長より以下の報告があった。

・『中国語学』第 264 号は、2017 年 10 月 31 日に 1,470 部を発行した。

・学会奨励賞受賞者として以下の 1 名を推薦した。

加納希美氏（愛知大学・非常勤講師）

「拡張二重目的語構文の成立条件―臨時量詞による結果描写との関連を中心に―」

3. ウェブリソース委員会報告

鈴木委員長より以下の報告があった。

・委員の交代について（1 年ごとに半数改選）

今年度で 2 名が任期切れとなるが、後任は任期終了までに決定し理事会に報告の予定。

4. 大会運営委員会報告

宮本委員長より以下の報告があった。

4.1. 委員の交代について

新任：下地早智子会員（次年度大会開催校）

4.2. 第 67 回全国大会研究発表審査結果

・6 月 13 日に応募締切。応募総数 76 件。うち有効応募総数 74 件（受付期間外の応募による不受理 1 件、規定違反による失格 1 件）。審査の結果、口頭発表 48 件、ポスター発表 7 件の計 55 件を採択した。不採択数は 19 件であった。

4.3. 大会プログラム公表後の変更点

・8 月 5 日のプログラム公表後、下記の点についてプログラムに変更が生じた。

・口頭発表の発表者 1 名より、病気療養による学業中断（退学）及び帰国のため、発表を辞退したい旨の申し出があった。提出された理由書に基づき委員会で審議した結果、汲むべき事情があると認め、辞退を承認した（10 月 2 日付。第 6 会場）。

4.4. その他

・予稿集は 9 名の原稿が期限までに未提出であった。督促の結果、8 名からは提出されたが、残る 1 名はこちらかの連絡にもまったく反応がなかったため、やむを得ず審査用要旨を掲載することとした。

・昨年度始めた「編集サポート」制度を今年度も継続した。委員の中から 2 名を「編集サポート」担当として指名し、開催校の依頼に基づいて編集の実務に従事してもらった。

・託児所については 1 名が利用予定（10 月 25 日締切）。

5. 辞典編纂委員会報告

平田委員長より編集作業の遅れと岩波書店側の事情について報告があった。

6. 学界展望ワーキンググループ報告

佐々木副会長より、日本中国学会が作成する学界展望の語学領域の執筆を本学会が担当することになった旨の報告があった。『中国語学』ならびに『日本中國學會報』に署名入記事として掲載し、両学会のウェブサイト上でも併せて公開する。2017 年版の執筆担当者は以下の通り。

はじめに……佐々木勲人（筑波大）
音韻部門……千葉　謙悟（中央大）
文字・訓詁部門……野原　将揮（成蹊大）
語彙・語法部門
　上中古……戸内　俊介（二松学舎大）
　近世……石崎　博志（琉球大）
　現代……池田　　晋（筑波大）
方言部門……八木　堅二（国士舘大）
教育部門……鈴木　慶夏（釧路公立大）

7. 次期大会開催校の決定

木津会長より、神戸市外国語大学（神戸市）において 2018 年 11 月 3 日（土）、4 日（日）の日程で開催する旨の報告があり、開催校代表の竹越孝会員より挨拶があった。

8. 役員選挙の結果について

選挙管理委員会の遠藤光暁委員長より、役員選挙の結果について報告があった。

【審議事項】

1. 内規・規定の改正について

・木津会長より、「会長及び理事選出方法に関する内規」及び「会則及び内規の変更」の［付則］の改正について提案があり、承認された。あわせて「会費納入に関する特別規定」の廃止についての提案があり承認された。詳細は本号「内規改正のお知らせ」「規定改正のお知らせ」および「特別規定廃止のお知らせ」を参照。

2. 予算案・決算案

2.1. 2016 年度会計決算案（資料参照）

・緑川幹事による報告と説明、及び朱鳳・林範彦会計監査による監査報告があり、報告の通り承認された。

2.2. 2017 年度補正予算案（同上）

・緑川幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

2.3. 2018 年度会計予算案（同上）

・緑川幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

3. IACL-27 の開催について

・木津会長および竹越理事より、2019 年 5 月 4 日～6 日に神戸市外国語大学にて IACL-27（国際中国語言学学会第 27 届年会）を開催する計画について、本学会に後援をお願いしたい旨の提案があり、承認された。後援の具体的な手続きと内容については，事務局と理事会で継続して検討していくこととなった。

4.『中国語学』投稿に関する誓約書について

・秋谷編集委員長より、『中国語学』への投稿時に不正が発生することを未然に防ぎ、著作権にかかわる規定を確認し了承していただくことを目的として、投稿者には誓約書の提出を義務づけたい旨の提案があった。文案資料の文言については、著作権規定との関係を明瞭にする文言を加えるべきという指摘を含めて承認された。文言の修正部分については、理事会のメール審議により確認された。修正後の確定版は、学会ウェブサイトまたは本ニューズレターの資料１を参照されたい。

5.『中国語学』投稿規定の改訂について

・秋谷編集委員長より、『中国語学』投稿規定と執筆要領の改訂について提案があった。電子データによる投稿の定着にともない、従来の紙をベースとした投稿規程と執筆要領に修正すべき部分があり、編集委員会で検討を重ねた。配布資料をもとに委員長より改訂箇所について説明があり、改訂案が承認された。

・改訂後の新版は、学会ウェブサイトまたは本ニューズレターの資料２・資料３を参照されたい。

6.『中国語学』電子化について

・秋谷編集委員長と鈴木ウェブリソース委員長より『中国語学』の電子化についての提案があった。資料に基づいて説明があり、今後は電子化へ向けて準備を始めていくことが承認された。ただし、電子化された後も、当面は会誌および抜刷りの紙媒体での印刷も平行していく方針が確認された。なお電子化の実施時期や紙媒体の撤廃などを含む具体的な作業上の課題については、引き続き委員会で検討を重ね、理事会に報告して継続審議をしていくこととなった。

2016 年度会計決算書

2017 年 11 月 11 日総会承認

日本中国語学会2016年度会計決算書(案)(2016年4月1日～2017年3月31日)

〈収入の部〉 単位：円

収入	予算	決算
前年度繰越金	2,750,139	9,426,602
積立金	2,520,000	2,520,000
通常会員・海外会員会費収入	6,500,000	6,154,500
賛助会員会費収入	720,000	690,000
『中国語学』売上金	400,000	362,877
予稿集売上金	450,000	465,628
印税（著作権使用料）		33,500
通常貯金利子		548
別刷追加分料金		23,736
雑益		13,500
計	13,340,139	19,690,891

〈支出の部〉 単位：円

支出	予算	決算
会誌印刷費	2,300,000	1,451,809
予稿集印刷費	500,000	690,552
大会助成費	300,000	300,000
支部活動助成費	450,000	127,087
通信費	500,000	488,369
事務費	2,000,000	1,955,458
大会事務費	300,000	248,709
学会連合等年会費	42,000	42,000
事務局費	350,000	243,532
編集委員会経費	120,000	120,000
ウェブリソース委員会経費	120,000	111,900
ホームページ関連経費	180,000	45,002
大会運営委員会経費	220,000	120,000
辞典編纂委員会経費	180,000	6,120
旅費交通費	600,000	805,000
会議費等雑費	180,000	84,489
学会奨励賞	100,000	100,000
会員名簿印刷費	780,000	872,316
積立金 [内訳] 記念大会積立金(32万) 事務委託関係積立金(124万) ウェブサイト構築積立金(50万) 国際会議開催支援積立金(50万)	2,560,000	2,560,000
予備費	1,558,139	9,318,548
計	13,340,139	19,690,891

監査の結果、経理内容は適切であり、経理諸表は的確に処理されているものと認めます。

2017年10月28日

2016年度会計監査 朱鳳

2016年度会計監査 林範彦

2017 年度補正予算案（2017 年 4 月～2018 年 3 月）　2017 年 11 月 11 日総会承認

＜収入＞	
前年度繰越金	9,318,548
積立からの繰入金	2,560,000
通常会員会費収入	6,500,000
賛助会員会費収入	690,000
『中国語学』売上金	402,533
予稿集売上金	450,000
印税	32,410
計	19,953,491

＜支出＞	（単位:円）
会誌印刷費	2,000,000
予稿集印刷費	800,000
大会助成費	300,000
支部活動助成費	450,000
通信費	500,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	42,000
事務局費	350,000
編集委員会経費	120,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	220,000
辞典編纂委員会経費	180,000
旅費交通費	600,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
選挙関連費	100,000
積立金	2,600,000
［内訳］	
記念大会積立金（34 万）	
事務委託関係積立金（126 万）	
ウェブサイト構築等積立金（50 万）	
国際会議開催支援積立金（50 万）	
予備費	8,811,491
計	19,953,491

2018 年度会計予算案（2018 年 4 月～2019 年 3 月）　2017 年 11 月 11 日総会承認

＜収入＞	
前年度繰越金	8,811,491
積立からの繰入金	2,600,000
通常会員会費収入	6,500,000
賛助会員会費収入	660,000
『中国語学』売上金	400,000
予稿集売上金	450,000
学界展望補助金	300,000
計	19,721,491

＜支出＞	（単位:円）
会誌印刷費	2,000,000
予稿集印刷費	800,000
大会助成費	300,000
支部活動助成費	450,000
通信費	500,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	42,000
事務局費	350,000
編集委員会経費	120,000
学界展望関連経費	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	220,000
辞典編纂委員会経費	180,000
旅費交通費	600,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
会員名簿印刷費	900,000
積立金	2,640,000
［内訳］	
記念大会積立金（36 万）	
事務委託関係積立金（128 万）	
ウェブサイト構築等積立金（50 万）	
国際会議開催支援積立金（50 万）	
予備費	7,439,491
計	19,721,491

例会および全国大会開催のお知らせ

今年度の例会実施予定

各支部における今後の例会実施予定は次のようになっています。

関東支部：2018 年 2 月 3 日
北陸支部：2018 年 3 月 17 日
中国支部：2018 年 1 月 28 日

次年度以降もひきつづき支部例会への発表、参会を歓迎いたします。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は、学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介し、年に 2 回発行の学会ニューズレターにも掲載されます。

なお、開催予定は変更になることがありますので、詳細は各支部例会世話人までお問い合わせ下さい。担当者の連絡先については、学会ウェブサイトをご参照下さい。

（事務局）

第 68 回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第 68 回全国大会は、2018 年 11 月 3 日（土）、4 日（日）に神戸市外国語大学（兵庫県神戸市）にて開催されます。ワークショップおよび一般研究発表の応募要項は 2018 年 4 月初旬までに学会ウェブサイトに掲載される予定です。

（第 68 回全国大会準備会）

事務局からのお知らせ

■ 退会について

退会は会費納付が前提となっています。退会希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。

■ 住所不明の会員

お知り合いの方がおられましたら、ご連絡をお願いします。

荒屋 勸、上野 倫代、大塚 秀明、小鹿 洋子、朱 新建、髙岸 晃夫、張 芃蕾、陳 昭宜、三野 園子、湯山 トミ子、劉 乃華、林 恒立、張 群、李 嵩、東 会娟、張 睿、陳 小珍、王 正、劉 春芳、張 晨迪、朱 美英、李 穎清、許 挺傑、賈 麗穎、劉 聡、樊 涛、金 香、劉 宇飛、王 玉、金 玉英、謝 美玲、紀 宝紅、許 芸涵、王 棋、崔 春子、李 婷、劉 玲、鄭 花、王 笑飛、丁 浩、李 勁栄、黄 綺燁、沈 庶英、陳 学雄、梅 佳、陳 海涛、湯 明昱、王 煒煒、于 姝君、楊 洲、薛 晨、斉 燦、江 氷燕、陳 相偉　（敬称略）

■ 2017 年度会費納入のお願い

会費未納の方には、11月に振込用紙を同封

して納入依頼のご連絡をお送りしました。年会費（一般会員6,000円、ネット会員5,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。速やかにご入金下さいますよう、御協力をお願いします。

郵便振替　加入者名：日本中国語学会
口座番号：00980-6-282216

■ 顧問・名誉会員の推挙

顧問・名誉会員の推挙は、推薦文を添えて2018年9月30日までに学会事務局宛にお願いします。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第61回までは1500円、それ以降は2000円となっています。詳しくは学会ウェブサイトをご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■ 事務局への問い合わせ

各会員の登録情報は、学会ウェブサイト（http://www.chilin.jp/）内の e-naf（オンライン会員情報管理システム）から、会員ご自身でログインして確認と更新ができます。事務局への問合せは、学会ウェブサイトの「お問い合わせ」ページをご利用下さい。

［資料１］

『中国語学』投稿に関する誓約書

『中国語学』編集委員会委員長殿

年　　月　　日

論文名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

上記論文(以下「本論文」)について、「『中国語学』投稿規程」および「日本中国語学会著作権規定」に則り、以下の項目を確認・遵守することを、ここに誓約いたします。

１．本論文は、未公刊のオリジナルなものであり、自分で執筆したものも含め、過去の学術誌や書籍等に記載されているものと類似するものではない。

２．本論文が査読を経て採否に関する決定が通知されるまでは他の学術誌に投稿しない。

３．本論文に捏造、改ざん、盗用、又はそれらと疑われる問題が発生した場合、著者および共著者が一切の責任を負う。

４.本論文が投稿された時点で、その著作権が日本中国語学会に帰属することに同意する。なお、『中国語学』に掲載されないことを本学会が決定した場合、本項は適用されない。

５．本論文が『中国語学』に掲載された場合、学会の許可するサイト、および電子ジャーナル版での公開を許諾する。

筆頭著者名（会員）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

共著者名１＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

共著者名２＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

共著者名３＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

共著者名４＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

※筆頭著者・共著者は全員署名して下さい。

［資料２］

『中国語学』投稿規程（2017 年 11 月改訂）

一．掲載原稿

(1) 投稿原稿

『中国語学』には会員から投稿された次の原稿（以下「投稿原稿」）を掲載する。投稿原稿は，本規程の二.から八.に定めた手続きに基づいて掲載される。

・研究論文…オリジナルな知見を含む学術論文。

・資料…新たに発見された重要資料の紹介・解説。

(2) 依頼原稿

投稿原稿以外に，編集委員会が会員または非会員に執筆を依頼した研究論文，展望論文，書評・紹介などを掲載することがある。

二．投稿条件

投稿原稿は次の条件を満たしていなければならない。条件を一つでも満たさないものは受理されない。また，査読中あるいは掲載前に条件が一つでも満たされないことが判明した場合は投稿自体を無効とする。

(1) 著者（共著の場合は筆頭著者）が 3 月 10 日（投稿受付締め切り日）時点で日本中国語学会の会員であり，かつ会費未納がないこと。

(2) 未公刊であり，かつ『中国語学』以外の雑誌等に投稿中でないこと。学会の予稿集や科学研究費補助金研究の報告書に掲載されたもの，未公刊の修士論文・博士論文の一部などは，その旨を添付表紙に記載すれば投稿できる。

(3) 別途定める「『中国語学』執筆要領」を遵守していること。

(4)「『中国語学』投稿に関する誓約書」（以下「誓約書」）を提出すること。

三．原稿の提出

投稿原稿は以下の要領を遵守し，提出するものとする。

(1) 原稿の提出は電子メールによる。Word 形式と PDF 形式両方の電子データを，編集委員会のアドレス bianwei■chilin.jp（■を@に代える）まで送付すること。

(2) 原稿の電子データは 2 月 20 日以降 3 月 10 日(日本時間 24 時)以前に送信すること。

四．誓約書の提出

(1) 誓約書の提出は電子メールによる。自署した誓約書の画像データ（JPG、JPEG 等）を編集委員会のアドレス bianwei■chilin.jp（■を@に代える）まで送付すること。

(2) 誓約書の電子データは 2 月 20 日以降 3 月 10 日(日本時間 24 時)以前に送信すること。

五．査読と採否の決定

(1) 編集委員会は，投稿原稿が扱う領域の研究者（1 編につき 3 名，非会員を含むことがある）を査読者として選び，評価を委嘱する。編集委員会は，査読者の評価及びコメントをふまえて，投稿原稿が次のいずれであるかを決定する。採否の結果は，査読者のコメントとともに，6 月上旬までに投稿者に通知する。

・採用（必要に応じて若干の修正を加えた上で掲載する。）

・要二次審査（1 か月の修正期間で修正された原稿の内容を編集委員会が確認し，最終的な採否を決定する。）

・不採用

(2)「採用」の場合は，編集委員会が通知した期日までに，最終原稿の電子データを編集委員長宛に送付する。

(3)「要二次審査」の場合は，編集委員会が通知した期日までに，修正原稿と修正内容リストの電子データを編集委員長宛に送付する。編集委員会は修正内容を確認し，採否を最終的に決定する。その際，査読者に意見を求める場合がある。二次審査の結果，「採用」になった場合は，編集委員会が通知した期日までに，最終原稿の電子データを編集委員長宛に送付する。

(4) サマリー・キーワードを含む最終原稿は「『中国語学』執筆要領」に定められた分量を遵守しなければならない。

六．校正，印刷

(1) 校正段階での内容の変更・追加に関わる修正は，原則として認めない。

(2) 印刷に当たり，特殊活字や図版の作成のため，額外の費用を要した場合は，投稿者にその費用の負担を求めることがある。

七．ウェブでの公開

採用された投稿原稿，ならびに依頼論文の本誌掲載に当たっては，将来これを学会がウェブ上で公開することに著者が同意したものとみなす。その際，学会は以下の 2 点を遵守する。(1)著者の氏名を付記する。(2)著者の了解なしに論文（サマリーを含む）の内容に変更を加えない。

八．その他

(1) 論文の採否や査読コメントに関する問い合わせには一切応じない。

(2) 原稿料は支払わない。

［資料３］

『中国語学』執筆要領（2017 年 11 月改訂）

1. 使用言語

◇ 投稿原稿の使用言語は，日本語，中国語，英語のいずれかとする。

◇ 本文，タイトル，サマリー，キーワード，引用例の訳文に用いる言語は，それぞれ次のように定める。執筆者の母語以外で書いた部分については，信頼できる母語話者の校閲を経たものでなければならない。

本文	タイトル・執筆者氏名	サマリー・キーワード	本文とは異なる言語の引用例の訳文
日本語	日本語・中国語・英語（3 言語）［注］	論文冒頭：中国語 論文末尾：英語	日本語
中国語	中国語・英語（2 言語）	論文冒頭：中国語 論文末尾：英語	中国語
英語	英語・中国語（2 言語）	論文冒頭：英語 論文末尾：中国語	英語

［注］英語のタイトルと執筆者氏名は，『中国語学』英文目次に掲載します。

2. 英語のタイトル，サマリー，キーワードの提出

◇ 本文に日本語または中国語を選択した場合，英語のタイトル，サマリー，キーワードは，採用または要二次審査となった者のみが，査読結果通知後，編集委員会が指定した期日までに別途提出する。なお，日本語と中国語のタイトル，サマリー，キーワードは投稿時に提出する。

3. 論文本体の書式と分量

◇ 論文本体は，学会ホームページに掲載されている「原稿テンプレート」ファイルを使用して作成する。「原稿テンプレート」の書式を遵守していない投稿は一切受理しない。

［参考数値］テンプレートの書式は以下の設定である。

■全体

ページの上下左右の余白（用紙 A4 縦）：上 67.5mm，下 67.4mm，左右 40 mm

行数（1 頁あたり）：31 行，　文字数（1 行あたり）：33 文字

■文字ポイント

タイトル：13.5 ポイント，　著者氏名：11 ポイント

アブストラクト：8.5 ポイント，アブストラクト文の左右の字落とし：本文の 2.5 字分

節見出し：9.5 ポイント

本文：9.5 ポイント

文末注：8 ポイント，　注の 2 行目以降の字落とし：2 文字分

参考文献：8 ポイント，　参考文献の 2 行目以降の字落とし：2 文字分

■文末アブストラクト

タイトル：13.5 ポイント

本文：8.5 ポイント，　本文の左右の字落とし：アブストラクト 31 文字分を中央揃

■行の開き

タイトルの上：1 行，　著者氏名の上：2 行，　キーワードの下：2 行

◇ 本文中の注番号のみ，1 字分の肩に上付きで半カッコを付して「3)」のようにつける。

◇ 論文本体は，上記の書式でプリントアウトして 19 ページ以内となるようにする。

◇ 図表のある場合は，その内部の文字（地図の中の記号などは除く）は原則として 6 ポイント以上とする。表の場合は文字数や行数を大幅に増加させてはいけない。なお，図表や参考資料がある場合には，それらを含めて規定のページ以内におさまるようにする。

◇ 日本語，中国語をローマ字化する場合は，日本語はヘボン式（長母音は ei 以外は字母をかさねる），中国語はピンインを原則とする。その他の非ローマ字は特別な必要がない限りローマ字転写する。

◇ 本文の文字フォントについては，日本語については「明朝体」，中国語については，簡体字は「SimSun」，繁体字は「MingLiu」または「SimSun」を，欧文は「Times New Roman」を用いることが望ましい（但し，本文が日本語で中国語の引用例が繁体字である場合，引用例は「明朝体」を用いてもよい）。なお，文字強調の際は，日本語については「ゴシック体」，中国語については，簡体字は「黒体」，繁体字は「黒體」を，欧文はイタリック体を用いることが望ましい。

やむを得ず特殊なフォントを使用する場合は，その旨が分かるように編集委員会宛にメモなどを添える。

4. 投稿原稿の構成

◇ 投稿原稿は「表紙」，「論文本体」からなる。

◇ 提出の際は，「表紙」，「論文本体」の電子データを bianwei■chilin.jp（■を@に代える）まで送付する。「表紙」と「論文本体」の電子データは，Word 形式と PDF 形式の両方を提出する。

4-1.本文が日本語の場合

(1) 表紙（1 枚，ページ番号はつけない）

1. 原稿の種別（研究論文，資料）
2. 論文タイトル（日本語・中国語・英語）（3 言語）[英語タイトルは査読結果通知後に提出する]
3. 執筆者氏名（日本語・中国語・英語）（3 言語）
4. 会員番号（共著論文の場合は会員全員について記載する）
5. 所属機関（ない場合は「なし」と明記）
6. 連絡先（住所，郵便番号，電話番号，電子メールアドレスを明記）。[共著論文の場合は全員について記載する]

(2) 論文本体（19 枚以内，ページ番号をつける）（執筆者名，所属機関名など，執筆者を特定し得る事項は書かないこと）

1. 日本語の論文タイトル

2. 中国語のサマリー（300 字以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）
3. 本文
4. 注
5. 参照文献一覧
6. 英語の論文タイトル，サマリー（100 語以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）[査読結果通知後に提出する]

4-2. 本文が中国語の場合

(1) 表紙（1 枚，ページ番号はつけない）

1. 原稿の種別（研究論文，資料）
2. 論文タイトル（中国語・英語）（2 言語）[英語タイトルは査読結果通知後に提出する]
3. 執筆者氏名（中国語・英語）（2 言語）
4. 会員番号（共著論文の場合は会員全員について記載する）
5. 所属機関（ない場合は「なし」と明記）
6. 連絡先（住所，郵便番号，電話番号，電子メールアドレスを明記）。[共著論文の場合は全員について記載する]

(2) 論文本体（19 枚以内，ページ番号をつける）（執筆者名，所属機関名など，執筆者を特定し得る事項は書かないこと）

1. 中国語の論文タイトル
2. 中国語のサマリー（300 字以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）
3. 本文
4. 注
5. 参照文献一覧
6. 英語の論文タイトル，サマリー（100 語以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）[査読結果通知後に提出する。]

4-3. 本文が英語の場合

(1) 表紙（1 枚，ページ番号はつけない）

1. 原稿の種別（研究論文，資料）
2. 論文タイトル（英語・中国語）（2 言語）
3. 執筆者氏名（英語・中国語）（2 言語）
4. 会員番号（共著論文の場合は会員全員について記載する）
5. 所属機関（ない場合は「なし」と明記）
6. 連絡先（住所，郵便番号，電話番号，電子メールアドレスを明記）。[共著論文の場合は全員について記載する]

(2) 論文本体（19 枚以内，ページ番号をつける）（執筆者名，所属機関名など，執筆者を特定し得る事項は書かないこと）

1. 英語の論文タイトル
2. 英語のサマリー（100 語以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）
3. 本文

4. 注
5. 参照文献一覧
6. 中国語の論文タイトル，サマリー（300 字以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）

5. 注意事項

(1) 表紙にはページ番号をつけない。論文本体には紙面下中央にページ番号をつける。

(2) 投稿時には謝辞のたぐいを書いてはならない。(謝辞は印刷初校段階において，執筆要領に示す制限枚数の許す範囲内で加えてよい。)

(3) 論文の本文および注に，執筆者名，所属機関名など，執筆者を特定し得る事項は書かないこと。(例えば，「筆者は‥2011 において…」(‥は筆者の姓）のような書き方もしないように留意する。)

(4) 同一著者による同一年の論著は，「潘悟云 2001a」，「潘悟云 2001b」のように，出版年の後にローマ字を加えて区別する。

(5) 本文や注の中で参照文献に言及するときは，「太田 1958：21-25」のようにページまで指示する。参照文献の著者が中国人・韓国人である場合は姓名を記し，他は特別な場合を除き姓のみを記す。同姓の著者は名まで記し，欧文の場合は，ファーストネームのイニシャルで W. Simon, H. Simon のように区別する。

(6) 原稿の種別を問わず，注は半角アラビア数字を用いて通し番号とする。

(7) 参照文献は，本文または注において引用・言及されたもののみを言語ごとにグルーピングし，以下の体裁に準じて日本語文献は五十音順に，中国語文献はピンイン順に，欧文文献はアルファベット順に記載する。

日本語文献

有坂秀世 1943.「音韻論」，博士学位論文，東京：東京帝国大学。
内田慶市，氷野善寛（編著）2016.『官話指南の書誌的研究』。東京：好文出版。
太田辰夫 1958.『中国語歴史文法』。東京：江南書院。
高田時雄（未刊）.「漢字の西方波及」，高田時雄（編）『漢字文化三千年』。京都：臨川書店。
平山久雄 2000.「「給」の来源―「過与」説に寄せて」，『中国語学』247：56-70 頁。

中国語文献

方经民 2003.《现代汉语空间方位参照系统认知研究》，博士学位论文，上海：上海师范大学。
吕叔湘 1992.《理论研究和用法研究》，中国语文杂志社编《语法研究和探索（六）》: 1-3 页。北京：语文出版社。
潘悟云 2001.《反切行为与反切原则》，《中国语文》第 1 期：99-111 页。
平田昌司（主编）1998.《徽州方言研究》。东京：好文出版。
秋谷裕幸（待刊）.《閩東區寧德方言音韻史研究》。臺北：中央研究院語言學研究所。
张伯江，方梅 1996.《汉语功能语法研究》。南昌：江西教育出版社。

欧文文献

Endo, Mitsuaki. 2016. “Sun” in Tai-Kadai. Mitsuaki Endo (ed.), *Studies in Asian Geolinguistics I.* Tokyo : Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA). https://publication.aa-ken.jp/sag1_sun_2016.pdf. 18-19. (accessed 2017/09/05)

Hashimoto, Mantaro. 1986. The Altaicization of Northern Chinese. In John McCoy and Timothy Light (eds.), *Contributions to Sino-Tibetan Studies (Cornell Linguistics Contributions)*. Leiden: E. J. Brill. 76-97.

Li, C. N., and Thompson, S. A. 1989. *Mandarin Chinese: A functional reference grammar.* London and New York: University of California Press.

Norman, Jerry. 1988. *Chinese.* Cambridge: Cambridge University Press.

Postal, Paul. 1970. On the Surface Verb "remind". *Linguistic Inquiry* 1: 37-120.

Sag, Ivan. 1976. Deletion and Logical Form. Ph.D. diss., MIT, Cambridge, Massachusetts.

Zwartjes, Otto. forthcoming. *Revitalising older linguistic documentation: Portuguese missionary grammars.*

6. 引用例の出典

◇ 引用例の出典は「参照文献」の後ろに列挙すること。

◇ 現代語文献からの引用例は，出典を明記する。（論証のキーとなる用例にはページも明記するのが望ましい。）

◇ 史的文献からの引用例には，出典，版本，ページを必ず明記する。なお，現代の刊行物ではない写本・刊本等から引用した場合であっても，出典を明記した上で，例えば巻数（或いは冊数），丁数といった引用箇所についての情報を具体的に示すこと。例：萬曆本《金瓶梅・第 17 回》9b,10

◇ 筆者の母語以外の言語による作例は，信頼できる母語話者の校閲を経たものでなければならない。

◇ 用例番号および括弧には半角を使用する。

7. 引用例の訳文

◇ 本文以外の言語の引用例には，本文と同じ言語の訳を付す。（例えば本文を日本語で書く場合，日本語以外の言語の引用例には日本語訳を付す。）文学作品等から引用された用例で長いものは，論証に不可欠と思われる箇所に下線を引き，その箇所の訳文のみを付す。

日本中国語学会々報　2017 年秋季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学人文科学研究所内
E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp
URL: http://www.chilin.jp/
発行日：2018 年 1 月 31 日